

三国史記の日食記事に就いて

飯島忠夫

日食記事によって年月の当否を検すること

歴史的事実として記載されてあるものの年月が果して正確で

あるか否か、若しくは其の事実の発生したのは大体如何なる年月であったかを検定する為の方法として、之に伴つて記されて居る所の日食記事を調査することは甚だ肝要である。希臘のターレスがメディア、リディア両国の会戦の最中に起つた日食を豫言したことが、ヘロドトスの歴史の中に記してあるが、後世の天文学者は此の事実の本づいて、それに計算の結果を綜合し、此の日食をB.C. 585若しくはB.C. 601のものとして居る。又、近年民国の梁啓超氏は其の著の「中国歴史研究法」の中に、詩経と春秋とにある日食の年月日が天文学上の計算に符合することを唯一の根拠として、之に伴う總ての記事の正確なることを証明しようとして居る。其の説は左の如くである。（これは坪井九馬三博士の史学研究法によつたものである。）

例如詩経「十月之交、朔日辛卯、日有食之、亦孔之醜」、經「六朝唐元清諸儒推算」、知「周幽王六年十月辛卯朔、確有日食」、中外曆対照、応為「西紀前七七六年」、欧洲学者亦考「定其年陽曆八月二十九日中国北部確見日食」、與「前所」拳胤征篇日食異説紛紜者「正相反。因「此可証」詩経必為「真書」、其全部史料皆可「信。與「此同」例者、如「春秋所」記「桓公三年秋七月壬辰朔日食」、「宣公八年秋七月甲子日食」、「「抛」欧洲学者所「推算」、前者当「紀前七零九年七月十七日」、後者当「紀前六零一年九月二十日」、今由東兗州府確見「日食」。

因^レ此可^レ証^下當時魯史官記事甚正確、而春秋一書、除^二孔子寓意褒貶既所用筆法^一外、其所^レ依魯史原文、皆極可^レ信。

此等の例に依つても、日食記事は歴史的事実の確否を決定するについて閑却すべきものでないことが知られるのである。

日食記事を取扱うについての注意

されど又日食記事を取扱うについては大なる注意を要するのであつて、梁氏の方法は必ずしも詩経と春秋との全部が信頼すべき歴史的事実の記録であることを証明し得たものではない。詩経の日食は支那の北部で見えるものであるけれども、其実はずっと蒙古の方へ寄つた所であつて、當時の周の都即ち今の西安府の附近では決して見られないものであるから、此の日食記事を含む所の詩篇の内容と矛盾した所があり、春秋の日食は、梁氏の引用したものは確に魯国で見えるものであるが、其の以外に尚多くの記事が有つて、其れ等の中には魯国附近乃至當時の支那列国の疆域内では到底見ることの出来ないものが数個存在して居るのである。此の事実は詩経春秋の日食記事に対して更に別種の解釈を下すべき必要を感じしめるものである。それについては嘗^かて東洋学報の上で陳述して置いた私見があるから、今は省略しようと思ふ。

三国史記の日食記事

三国史記は高麗朝の仁宗王の二十三年(A.C. 1145)に金富軾が王命を奉じて撰述したもので、半島人の自ら著述した歴史として現存するものの中では此れが一番古いのである。三国とは新羅、高句麗、百済を指すのであつて、新羅の建国をばB.C. 57に、高句麗の建国をばB.C. 37に、百済の建国をばB.C. 18に置いてある。日食や彗星等に関する天文学的事項は建国の初から豊富に記載されて居る。先ず新羅の始祖赫居世の時代に於ける日食記事を挙ぐれば左の如くである。

赫居世四年(B.C.54)夏四月辛丑朔日有食之
 二十四年(B.C.34)夏六月壬申晦日有食之
 三十年(B.C.28)夏四月己亥晦日有食之
 三十二年(B.C.26)秋八月乙卯晦日有食之
 四十三年(B.C.15)春二月乙酉晦日有食之
 五十六年(B.C.2)春正月辛丑朔日有食之
 五十九年(B.C.2)秋九月戊申晦日有食之

高勾麗の始祖東明王の時代には日食記事が無い。百濟の始祖溫祚王の時代には左の日食記事が有る。

溫祚王六年(B.C.13)秋七月辛未晦日有食之

此の八個の日食記事を取り、Oppolzer の日食表(Kanon der Finsternisse)に当てて検査すれば、何れも皆現代天文学の計算から出た結果に符合して居て、しかも皆能く新羅又は百濟の地から見得べき性質のものである。若し梁氏の論法を以て三国史記の上に加える時は、此等の始祖王の時代の歴史は盡く信憑すべきものであらねばならぬ。従つて其れより以後の時代に属する記事も大体に於ては皆信すべき価値あるものと認めることが出来るのである。

日食記事の根本資料如何　しかし此等の日食記事を根拠として、三国史記の正確なることを証明しようとする為には、先ず此等の記事が半島に於ける実見者の手に依つて作成されたことについて、一点の疑惑も起らない様にして置かねばならぬ。それには、此等の記事と相結合し相錯綜して現われ来る天文事項以外の各種の記事の性質が如何なるものであるかについて、一般的觀察を行うことを要する。然るに、三国史記は古来

甚だ評判の良くない書であつて、東国通鑑とうこくつうかんの著者は、其序文の中に、「下逮三国。僅有三国乘。粗略太甚。加以無稽不經之說」と述べて居り、東史綱目の著者は其序に於て、「三国史疎略而爽實」と言つて居り、又其の凡例の中に於て此書を評して、「金氏撰史、於新羅則依本史之遺存者、麗濟則尤無可徵、只憑所謂古記斷爛之伝、三国並取中国史以補之、其為書也。疎略訛謬、殆不成史家規模」と言つて居る。又今西龍博士の説に依れば、新羅の年代は第二十一代智王(A.D. 478即位)以後に於て、高句麗の年代は第十七代小獸林王(A.D. 371即位)以後に於て、百濟の年代は第十二代契王(A.D. 344即位)以後に於て始めて信すべきものであるということであり、前間恭作氏の説に依れば、新羅の記事は第十七代奈勿王(A.D. 356即位)以後が大體に於て信すべきもので、其れより以前の十六代は王名を始めとして全部虚称のものということである。此等の説に参照するときは、始祖の時代の日食記事が如何に眞実のものに符合するにもせよ、それは直に其時代の歴史全体を信ぜしめる為には何等の力も無いものとなるのである。

然らば此の如き虚構の記事の間に介在する日食の記事のみが何故に正確であるかということが新しい問題となつて来る。

三国史記の編纂方法

三国史記の著者が支那の典籍の中にある材料を使用して居ることは、其の志類の部の中に、此等の書籍の名を明記して、其の中から引用して居る資料が有ることに依つても知られるのである。其の書目を列記すれば、次の如くである。

後漢書。北史。梁書。唐書。冊府元龜。琴操。風俗通。積名。通典。新唐書。隋書。漢書。賈耽古今郡国志。

志類の部に於て此様であるとすれば、其の他の全部を通じて、支那の正史や各種の書籍から引用されて居る

三国史記の日食全部と支那の資料との比較 三国史記の中にあるすべての日食を同じ方法によって支那の正史の中にあるものと対照して見ることはまた一の興味ある仕事であらねばならぬ。そこで自分は次の表を作って見た。

三国史記日食表

一、新羅本紀

王	年	西紀	月	日	支那年号	年	西紀	月	日	出典
赫居世	4	B.C. 54	4	辛丑朔	五鳳	4	B.C. 54	4	辛丑朔	漢書五行志
”	24	”	6	壬申晦	昭平	5	”	6	壬申晦	”
”	30	”	4	己亥晦	”	1	”	4	己亥晦	”
”	32	”	4	乙卯晦	”	3	”	8	乙卯晦	”
”	43	”	2	乙酉晦	永始	2	”	2	乙酉晦	”
”	53	”	1	辛丑朔	元壽	1	”	1	辛丑朔	”
”	59	A.D. 2	9	戊申晦	元始	2	A.D. 2	9	戊申晦	”
南解	3	”	10	丙辰朔	居攝	1	”	10	丙辰朔	漢書王莽伝
”	13	”	7	戊子晦	天鳳	3	”	7	戊子晦	”

王	年	西紀	月	日	支那年号	年	西紀	月	日	出典
祇摩	13	A.D. 124	9	庚申晦	廷光	3	A.D. 124	9	庚辰 [*] 晦	後漢書五行志
”	16	”	7	甲戌朔	永建	2	”	7	甲戌朔	”
逸聖	8	”	9	辛亥朔	永和	6	”	9	辛亥朔	”
阿達羅	13	”	1	辛卯朔	延熹	9	”	1	辛卯朔	”
伐休	3	”	5	壬申晦	中平	3	”	5	壬辰 [*]	”
”	10	”	1	甲寅朔	初平	4	”	1	甲寅朔	”
”	11	”	6	乙巳晦	興平	1	”	6	乙巳晦	”
奈解	5	”	9	庚午朔	建安	5	”	9	庚午朔	”
”	6	”	3	丁卯朔	”	6	”	10	癸未 [*] 朔	”
沾解	10	”	10	晦	”	”	”	”	”	唐書天文志
元聖	3	”	8	辛巳朔	貞元	*2	”	8	辛巳朔	”
”	5	”	1	甲辰朔	”	5	”	1	甲辰朔	”
”	8	”	1	壬子朔	”	8	”	11	壬子朔	”
袁莊	2	”	5	壬戌朔 (日当食不食)	”	17	”	5	壬子朔	”
”	9	”	7	辛巳朔	元和	3	”	7	辛巳朔	”(但唐書の終口に 是の字)
憲德	10	”	6	癸丑朔	”	13	”	6	癸丑朔	”

王	年	西紀	月	日	支那年号	年	西紀	月	日	出典
與德	11	A.D. 838	1	辛丑朔	開成	1	A.D. 836	1	辛丑朔	唐書天文志
文聖	6	”	2	甲寅朔	會昌	4	”	2	甲寅朔	”
真聖	2	”	3	戊戌朔	文德	1	”	2	戊戌朔	”
孝恭	15	”	1	丙戌朔	乾化	1	”	1	丙戌朔	旧五代史天文志

日本書紀

王	年	西紀	月	日	支那年号	年	西紀	月	日	出典
太祖	62	A.D. 114	3	元初	延光	1	A.D. 114	10	戊子朔	後漢書五行志
”	64	”	3	”	”	3	”	3	二日辛亥	”
”	72	”	9	庚申晦 (新羅本紀も出ず)	延光	3	”	9	庚辰晦	”
次大王	4	”	4	丁卯晦	建和	3	”	4	丁卯晦	”
”	13	”	5	甲戌晦	延熹	1	”	5	甲戌晦	”
”	20	”	1	晦	”	8	”	1	丙申晦	”
新大王	14	”	10	丙子晦	光和	1	”	10	丙子晦	”
故国川	8	”	5	壬辰晦	中平	3	”	5	壬辰*	”
山上	23	”	2	壬子晦	建安	24	”	2	壬子晦	”

王	年	西紀	月	日	支那年号	年	西紀	月	日	出典
西川	4	A.D. 273	7	丁酉朔	泰始	9	A.D. 273	7	丁酉朔	晋書天文志
陽原	10	”	12	晦						

三、四、庚、永

王	年	西紀	月	日	支那年号	年	西紀	月	日	出典
溫祚	6	B.C. 13	7	辛未晦	永始	4	B.C. 13	7	辛未晦	漢書五行志
多婁	46	A.D. 73	5	戊午晦	永平	16	A.D. 73	5	戊午晦	後漢書五行志
己婁	11	”	8	乙未晦	永元	1	”	8	乙未晦	”
”	16	”	6	戊戌朔	永元	4	”	6	戊戌朔	”
盖婁	28	”	1	丙申晦	延熹	8	”	1	丙申晦	”
肖古	5	”	3	丙寅晦	建寧	3	”	3	丙寅晦	”
”	24	”	4	丙午朔	中平	6	”	4	丙午朔	”
”	47	”	6	庚寅晦	建安	17	”	6	庚寅晦	”
仇首	8	”	6	戊辰晦	黄初	2	”	6	戊辰晦	晋書天文志 宋書五行志
”	9	”	11	庚申晦	”	3	”	11	庚申晦	晋書·宋書
比流	5	”	1	丙子朔	永嘉	2	”	1	景子朔 丙午朔	晋書天文志 宋書天文志

王	年	西紀	月	日	支那年号	年	西紀	月	日	出典
比流	32	A.D. 335	10	乙未朔	咸康	1	AD 335	10	乙未朔	晉書·宋書
近肖古	23	”	3	丁巳朔	太和	3	”	3	丁巳朔	”
辰斯	8	”	5	丁卯朔	太元	17	”	5	丁卯朔	”
阿莘	9	”	6	庚申朔	太隆天	4	”	6	庚申朔	晉書·宋書 魏書天象志
腆支	13	”	1	甲戌朔	義熙	13	”	1	甲戌朔	晉書·宋書
”	15	”	11	丁亥朔	元熙	1	”	11	丁亥朔	”
毗有	14	”	4	戊午朔	元嘉 元平真君	17	”	4	戊午朔	宋書五行志 魏書天象志
蓋鹵	14	”	10	癸酉朔	泰皇始興	4	”	10	癸酉朔	宋書五行志 魏書天象志
三斤	2	”	3	己酉朔	昇平	2	”	9	乙巳朔 * 乙酉晦	宋書五行志 魏書天象志
東城	17*	”	5	甲戌朔	隆太昌和	1	”	5	甲戌朔	南齊書天文志 魏書天象志
武寧	16	”	3	戊辰朔	熙平	1	”	3	戊辰朔	魏書天象志
聖威	25	”	1	己亥朔	武定	5	”	1	己亥朔	”
德	6	”	5	丙辰朔	永定	3	”	5	丙辰朔	隋書天文志
”	19	”	9	庚子朔	建德	1	”	9	庚子朔	周書帝紀
”	39	”	26	壬申晦	開皇	12	”	7	壬申晦	隋書帝紀

新羅本紀の日食記事の当否の点検

此の表を取って Oppolzer の日食表に照して仔細に点検すれば、新羅本紀中の祇摩尼師今十二年 (A.D. 124) の日食は史記の庚申が正しく、後漢書の庚辰が誤って居る。又、伐休尼師今三年 (A.D. 186) の日食は史記の壬申が誤って居て、後漢書の壬辰が正しい。又、奈解尼師今六年 (A.D. 201) の日食は史記の三月丁卯朔が正しく、後漢書の十月癸未朔が誤って居る。此年の十月癸未には日食が無い筈であるから、これは後漢書の本文に於て、其の次の行にあるところの「建安十三年十月癸未朔日有食之」の文に紛れて誤写されたのであろう。沾解尼師今十年 (A.D. 256) の十月晦^{みそか}は日食が有るべき日でないから、これは支那の正史に見えないのが正しいので、史記に有るのは杜撰であらう。元聖王三年 (A.D. 789) の記事に対応するところの貞元二年 (A.D. 786) のものは、其実は翌三年 (A.D. 787) に起るべきものである。これは新旧唐書に誤写が有るのである。此の如く訂正して見れば、此れより以下の九個の日食は、皆正しいものよりも二年ずつ後れて記載して有る。これは如何に解釈すべきであらうか。此の年代に於ける其他の種類の記事の年月が唐書と一致して居るに拘^{かか}らず、日食記事のみが此の如きものになって居るのは、やはり純粹の新羅の記録に書き載せられて有つたものとは思われぬ。此の時代には、新羅では既に善徳女王の時に瞻星台も造られてあり、(三國遺事による) 景德王の八年 (A.D. 749) には天文博士一員漏刻博士六員を置いたこともあるのであるから、(三國史記による) 新羅固有の日食記事も当然存在した事であらうと思われるが、金富軾が三國史記を著す頃には、それらの資料は既に混びて居たのであらう。三國史記にある二年の連続的錯誤は唐書から引用する際に於ける編者の過失によるものと見るべきである。但し其中で哀莊王二年 (A.D. 803) の日食のところ「日当^レ食不^レ食」という文が見える。之に相当する支那の貞元十七年 (A.D. 801) のものには其様

なことが無い。当食不食ということは、曆の計算の結果としては食の有るべき日であるが実際にはそれが見えなかったという意味である。此の様な例は他にも有るのであつて、旧唐書天文志に載せてあるものには次の様なものがある。

- (a) 広徳二年(A.D. 764)五月丁酉朔、日当_レ食不_レ食、群臣賀。
- (b) 大歴十三年(A.D. 778)甲戌、有司奏、合_レ食不_レ食。
- (c) 貞元六年(A.D. 790)正月戊戌朔、有司奏、合_レ食不_レ食、百寮称_レ賀。

此等の日食は何れも金環食であつて、其食の経過する中心は、(a)は北米合衆国の東南の海中から始まつて、英国を経て、印度の東辺、ビルマの境界に至るまでの間であり、(b)はラブラドルからグリーンランド辺までの間であり、(c)は印度の南端の沖からジャワ、新^{ニユー}ギニアを経て、太平洋の中までの間であつて、何れも支那にまでは見えないものである。此れは其当時の日食算法がまだ不精密であつた結果である。(続日本紀には此の(b)が宝亀九年の條に記して有つて、別に何の断りもないが実は我国でも見える筈が無いものである。これは曆算の結果として記されて居たものを其儘に編纂してしまつたのであろう。)さて哀莊王二年のものが果して支那では見えるが朝鮮では見えないものであつたか、又は両地共に見えないものであつたかを調査して見れば、此の食の中心の線はスマトラの西海から、マラッカ半島、カンボジアの端、呂宋島^{ルソン}を過ぎ、布哇^{ハワイ}の近海を経て太平洋の中に終るもので、長安でも新羅でも能く見られる筈のものである。然^{しか}らば、これも亦編纂者の誤記か又は故意の製作であらう。新羅の日食記事の最後である孝恭王十五年(A.D. 911)のものも真の計算に符合し、又旧五代史と一致して居る。これのみは新羅の真紀に依つたものと考えられぬでもないが、確に左様であるとは断言することが出来ない。

高勾麗本紀の日食記事の点検

高勾麗本紀にある太祖大王六十二年 (A.D. 114) のものは誤である。これは本文に於て、其次の行にある六十四年のものと同文であることから考えれば、多分其れに牽かれて誤写を生じたのであろう。太祖七十二年 (A.D. 124) の庚申は正しく、後漢書の庚辰は誤である。これは新羅本紀にも出て居る。故国川王八年 (A.D. 186) の壬辰は三国史記も後漢書も共に誤つて居て、其実は壬申であらねばならぬ。これも新羅本紀に出て居るものであるが、それには壬申とある。陽原王十年 (A.D. 554) のものは支那の正史にも出て居ないので、且つ全然杜撰である。

百濟本紀の日食記事の点検

百濟本紀にある己婁王十一年 (A.D. 87) のものに対する後漢書の記事が元和元年 (A.D. 84) となつて居るが、それは章和元年 (A.D. 87) と改訂されねばならぬ。蓋婁王二十八年 (A.D. 155) のものは延嘉八年 (A.D. 165) のものに対応するのであるが、後のものが正しいから、前の二十八年は三十八年と改訂されねばならぬ。此の誤は東国通鑑の編纂以前から既に成立つて居たものと見え、同書には次の記載が有る。

漢永寿元年、新羅阿達羅羅二年。高句麗次大王十年、百濟蓋婁王二十八年。冬十月、新羅阿湊吉宣、謀叛事竟奔百濟、新羅王移書請之、不從、王怒、

出師擊之、百濟諸城、堅壁自守、新羅兵糧盡乃歸。

此の阿湊吉宣の謀叛の事は三国史記の新羅本紀には、

(阿達羅尼師令) 十二年冬十月、阿湊吉宣謀叛兇覺、懼誅亡入百濟、王移書求之、百濟不許、王怒、

出師伐之、百濟嬰城守不_レ出、我軍糧盡乃歸。

とあり、又百濟本紀には、

(蓋婁王) 二十八年春正月丙申晦、日有_レ食之、冬十月、新羅阿湊吉宣謀叛事露來奔、羅王移書請之、

不_レ送、羅王怒出_レ師來伐、諸城堅_レ壁自守不_レ出、羅兵絶_レ糧而歸。

とあつて、三国史記の年表を見れば、阿達羅尼師今の十二年は蓋婁王の三十八年に當つて居る。そして、新羅本紀には此記事の前に十一年の記事が有り、又後に十三年の記事も有る。百濟本紀には其次に三十九年の記事が有る。たとい日食の計算に抛らずとも、此点だけからしても二十八年は当然三十八年と改められねばならぬ。それにも拘_レらず、東国通鑑には蓋婁王の二十八年を標準として阿達羅尼師今の十二年にあつた記事をも其の二年の方に移してしまつたのである。これは東国通鑑の編者の過失である。東史綱目にはさすがに正しい場所に置いてある。

肖古王五年の日食 肖古王五年(A.D. 170)の三月丙寅晦_{みそか}の日食は、実は翌日丁卯の朝でなくては現われなものである。それが後漢書に記されてあり、それからして又、三国史記に引かれて居るのは、其当時の不精密な計算の結果を記して置いたものが混入したものと推定される。支那に於ける日食の算法は春秋が著述された時既に存在して居たものの様であるが、其後中絶してしまつて、後漢の靈帝の頃に劉洪が乾象曆を造つた時、之を用いたことが始めて明瞭となるのであるが、此の記事によつて、其の端緒が既にA.D. 170の頃に開けて居たことを知り得るのである。

比流王、三斤王、東城王、威徳王の時の日食 比流王五年(A.D. 308)の丙子朔は晋書の景子朔(魏晋の頃には丙を景と改称して居た)に依つたのであるが、これは宋書に丙午とある方が正しいのである。三斤王二年(A.D. 478)の己酉は正しく、魏書の乙酉は誤である。魏書の誤は後世になつてから出来た伝写の誤であろう。此の日食は史記に三月己酉朔とあり魏書に二月乙(己)酉晦とあるが、これは此の頃両国の曆法が同一でなかつた為に生じた差異と解せられぬことも無い。しかし此の記事に限つて、特に百濟固有の記録に依つたも

のとする程の深い理由も無いのであるから或は何れか一方に伝写の誤を含んで居るのかも知れぬ。宋書にある此年九月乙巳朔のものは正しい。東城王十七年 (A.D. 495) の日食は其の实十六年に有るべきもので、魏書及南齊書の方が正しいのである。百濟本紀の記事は東城王十六年の條に次ぎで、十七年のものが記してあるので、これは編者の過失と見るべきである。威徳王六年 (A.D. 559) の五月丙辰朔と、三十九年 (A.D. 592) の七月壬申晦とのものは、其の日が真のものよりは一日早くなって居る上に、何れも支那朝鮮では見えないものである。

三国史記の日食記事の本となつた支那の資料　三国史記の日食記事の本となつたと思われる支那の資料を列举すれば、次の如くである。

漢書。後漢書。晋書。宋書。魏書。南齊書。陳書。周書。隋書。旧唐書。唐書。旧五代史。

但し宋書から取つたと思われるものは、皆晋書に出て居るのであり、宋書と南齊書とから取つたと思われるものは皆魏書に出て居り、陳書から取つたと思われるものは隋書にも出て居るものであつて、其の上宋書には無くて晋書魏書に有るものも有るから、宋書南齊書陳書は或は用いなかつたかも知れぬ。又唐書と旧唐書とは何れを用いるも同様であるから、実際に使用したものは何れか一方の書であつたであろう。旧唐書の元和三年の七月癸巳が誤で、新唐書の七月辛巳が正しいことから考えれば、或は新唐書を用いたと見る方が宜しいかも知れぬ。但しこれは三国史記編纂当時の旧唐書に既に此の誤写が含まれて居たと仮定した上の事である。又後漢書から引用した部分が今の流布して居る後漢書よりも誤謬の少いのは、其の当時編者の用いた本書が善いものであつて、今の流布本が悪いことを示して居るのである。

三国で見られなかつた日食　Oppolzer の日食表の中にある日食の図によつて、以上のすべての日食を検べ

て見ると、三国では多分見られなかったと思われる日食は、逸聖尼師今八年(A.D. 141)九月辛亥、伐休尼師今三年(A.D. 186)五月壬申、奈解尼師今六年(A.D. 201)三月丁卯、元聖王三年(A.D. 789 実は787)八月辛巳、新大王十四年(A.D. 178)十月丙子、多婁王四十六年(A.D. 73)五月戊午、己婁王十一年(A.D. 87)八月乙未、仇首王八年(A.D. 221)六月戊辰等のものである。

其の他に尚前に掲げたところの威徳王六年及三十九年のものが有る。これは支那の記事を無批判に取入れた結果として当然起るべき事柄である。

(大正十五年六月、東洋学報第十五卷第三号掲載)

-
- 『支那古代史と天文学』（恒星社、一九三九年二月）所収。
 - 読みやすさのために、旧かな遣いは新かな遣いに変更し、適宜振り仮名をつけた。
 - PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}2_{\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{d}^{\text{v}}\text{i}^{\text{p}}\text{d}^{\text{f}}\text{m}^{\text{x}}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。